

日中の小学校音楽科における読譜に関する内容の比較

A Comparison about the Content of Musical Reading between Elementary School Music Courses in Japan and in China

周 紀 瑩
SHU Kiei

キーワード：読譜，日中比較，小学校音楽，五線譜，数字譜

はじめに

読譜とは、文字通りに言えば、楽譜を読むことである。読譜の対象となる楽譜とは、旋律やリズム、和声などが視覚的に符号化されたものである（安達真由美 2003:613）。一般に読譜とは〈視覚的に符号化された音楽要素を解説し再生する過程〉と定義される（同：613）。

日本と中国の小学校教育では、音楽の学習に必要なものとして、古くから読譜を取り入れてきた共通の歴史がある。教科書の表現対象となる音楽作品は、全て楽譜で表される。楽譜から音楽をイメージしたり実際に演奏したりする読譜能力を育てることは、日中両国において古くて新しい課題である。読譜の対象となる楽譜には、五線譜、数字譜、線譜や絵譜、歌詞譜や図形楽譜などがあるが、本稿では、五線譜、数字譜、線譜や絵譜を対象とする。ここでいう数字譜とは、階名のドを1、レを2、ミを3、ファを4、ソを5、ラを6、シを7、ドを1と表記するものである。すなわち、移動ドのドレミが数字で表記されている楽譜である。

さて、五線譜、数字譜などの読譜の際、音高をどのように把握するのかという問題がある。すなわち、絶対的な音高として読むか、長調や短調の相対的な音の位置として読むかということである。前者は「音名」あるいは「固定ド」、後者は「階名」あるいは「移動ド」で読むことである。

日本の学校教育では、学習指導要領において一貫して「移動ド唱法」を用いることを原則としている。しかし、現在、日本の小学校においてはハ長調とイ短調の読譜しか求められていないため、実質的に移動ドによる読譜が実施されていない状況にあり、器楽では固定ドで読むことが通例となっている。現在の日本の小学校音楽教科書では、低学年では絵譜がみられるものの、中学年以降は、日本の民謡や箏曲など一部の楽譜を除き、読譜の対象は「五線譜」である。五線譜で示された楽譜には、ハ長調だけではなく、イ短調、ヘ長調、ニ短調、ト長調などの楽譜もみられる。しかし、教材曲の学習を通して、移動ドについて解説している箇所がみられない状況である¹。

一方、中国の小学校音楽教科書には、数字譜²または五線譜が用いられた2種類の版本がある。だが、数字譜による教科書を選択して使用する学校や教師が圧倒的多数という現状がある³。中国では、伝統楽器などでは基本的に数字譜が用いられている。これまで五線譜よりも数字譜を用いてきたという歴史があり、圧倒的に普及しているのは数字譜である。

また、日本と中国の双方の小学校音楽教科書にみられる読譜教材が「絵譜」である。絵譜とは、音高や音長などを音楽と絵の融合した形で示したものである。絵譜を用いることは、とくに低学年における読譜指導において重要な指導方法の一つである。

日中両国の読譜には、絵譜の使用に代表される共通の学習方法と、数字譜のように、中国の音楽文化に根ざした学習方法がある。したがって、日本と中国における読譜に関する内容を比較することで、双方の音楽科教科書をはじめ、実際の読譜指導の改善・充実にに向けた示唆を得ることが期待できる。

しかしながら、これまで日本と中国の音楽教育を比較した研究には、文化の交流史、音楽づくりと創作、音楽教科書の内容などに関するもの⁴がみられるが、読譜に関する内容を比較した研究は、管見の範囲では見られない。

これらのことを踏まえて本論では、日中両国の読譜に関する基本的な考え方、小学校音楽教科書における読譜に関する内容と方法を比較し、両国の読譜に関する現状と課題を明らかにする。

1. 現行の公的な基準にみられる読譜に関する内容

日本の学校音楽教育は、1872（明治5）年の学制頒布に伴い「唱歌」という教科名によってスタートした。一方、中国の学校教育は、公的には1902年の新教育制度における『欽定学堂章程』の導入にはじまるが、当時、芸能に関する授業内容は体操を中心に導入されており、具体的な音楽教育課程が含まれていなかった。初めて音楽の教育課程が学校教育に取り入れられたのは1907年に頒布された『学部奏定女子小学堂章程』からである（林翰羽 2018：28）。

現在では、日中両国において、小学校音楽教育における教育課程の基準が、公的な機関から次のように示されている。本論で論じる義務教育を司る公的な機関は、日本では文部科学省、中国では中華人民共和国教育部のことである。

日本：文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）第6節 音楽』⁵（以下、学習指導要領）

中国：中華人民共和国教育部『義務教育音楽課程標準（2011年版）』⁶（以下、音楽課程標準）

これらの基準には、現在、日本と中国の小学校音楽科の公的な教育課程において、どのような目標や内容を、どの学年で、どのように扱うかについて基準となる事項が、それぞれの国の立場から示されている。

以下、日中両国における現行の公的な基準において、読譜に関する内容がどのように示されているのかをみていく。表1は、学習指導要領と音楽課程標準にみられる読譜に関する内容の表に示したものである（下線は引用者加筆）。

表1 学習指導要領と音楽課程標準にみられる読譜に関する内容からの抜粋⁷

学年	学習指導要領（日本）	音楽課程標準（中国）
第1学年及び第2学年	<p>A 表現</p> <p>(1) 歌唱の活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。</p> <p>ウ 思いに合った表現をするために必要な次の(7)から(ウ)までの技能を身に付けること。</p> <p>(7) <u>範唱を聴いて歌ったり、階名で模唱したり暗唱したりする技能</u></p> <p>(2) 器楽の活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。</p> <p>ウ 思いに合った表現をするために必要な次の(7)から(ウ)までの技能を身に付けること。</p> <p>(7) <u>範奏を聴いたり、リズム譜などを見たりして演奏する技能</u></p>	<p>領域二 表現</p> <p>(4) 読譜</p> <p>・<u>簡単なリズムを認識し、音（おと）、言葉、体の動きで簡単なリズムを表現することができる。</u></p> <p>・<u>唱名で簡単な楽譜を模唱することができる。</u></p>
第3学年及び第4学年	<p>A 表現</p> <p>(1) 歌唱の活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。</p> <p>ウ 思いに合った表現をするために必要な次の(7)から(ウ)までの技能を身に付けること。</p> <p>(7) <u>範唱を聴いたり、ハ長調の楽譜を見たりして歌う技能</u></p> <p>(2) 器楽の活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。</p> <p>ウ 思いに合った表現をするために必要な次の(7)から(ウ)までの技能を身に付けること。</p> <p>(7) <u>範奏を聴いたり、ハ長調の楽譜を見たりして演奏する技能</u></p>	<p>領域二 表現</p> <p>(4) 読譜</p> <p>・<u>習った曲に合わせて音名、音符、休符及び常用の音楽記号を認識する。</u></p> <p>・<u>楽器に合わせて簡単な楽譜を視唱することができる。初歩的な楽譜を読む能力を持つ。</u></p>
第5学年及び第6学年	<p>A 表現</p> <p>(1) 歌唱の活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。</p> <p>ウ 思いに合った表現をするために必要な次の(7)から(ウ)までの技能を身に付けること。</p> <p>(7) <u>範唱を聴いたり、ハ長調及びイ短調の楽譜を見たりして歌う技能</u></p> <p>(2) 器楽の活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。</p> <p>ウ 思いに合った表現をするために必要な次の(7)から(ウ)までの技能を身に付けること。</p> <p>(7) <u>範奏を聴いたり、ハ長調及びイ短調の楽譜を見たりして演奏する技能</u></p>	<p>領域二 表現</p> <p>(4) 読譜</p> <p>・<u>習った曲に合わせて音名、音符、休符及び常用の音楽記号を認識する。</u></p> <p>・<u>楽器に合わせて簡単な楽譜を視唱することができる。初歩的な楽譜を読む能力を持つ。⁸</u></p>
全学年	<p>〔共通事項〕</p> <p>(1) 「A表現」及び「B鑑賞」の指導を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。</p> <p>ア 音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取りながら、聴き取ったこととと感じ取ったこととの関わりについて考えること。</p> <p>イ 音楽を形づくっている要素及びそれらに関わる（身近な）<u>音符、休符、記号や用語</u>について、音楽における働きと関わらせて理解すること。</p> <p style="text-align: center;">※（ ）内は第1学年及び第2学年のみ。</p>	記載なし

小学校第1学年及び第2学年の内容では、両国とも児童が「模唱」することが示されている。しかし、日本では階名で、中国では「唱名」で歌うことになっている。ここでいう「唱名」とは、実際の状況に応じて、移動ドまたは固定ドで歌うことである。なぜ、このような示し方になっているのだろうか。それは、前述のように中国の小学校音楽教科書には、数字譜または五線譜が用いられた2種類のバージョンがあり、実際の状況に応じて、固定ドや移動ドを選択する必要があることが要因だと思われる。さらに、日本では小学校の学習内容にハ長調とイ短調の2つが明示されているが、中国では具体的な調が明示されていない。この要因として、中国の小学校段階の五線譜学習はハ長調を中心に行われているものの、数字譜の場合は全て階名で授業が行われているので、具体的な調を規定することに、積極的な意味を見いだせないことが想定される。

ところで、日本の学習指導要領の内容は、「A表現」、「B鑑賞」、「共通事項」からなる。「A表現」は、「(1)歌唱」、「(2)器楽」、「(3)音楽づくり」3つの分野があり、読譜に関する内容は、「(1)歌唱」及び「(2)器楽」の技能に関するウ(7)に示されている。また、「共通事項」(1)イには、下線部に示したように、読譜の対象となる音楽に関する音符、休符、用語や記号について、音楽における働きと関わらせて理解することが示されている。

一方、中国の音楽課程標準では、「感受と鑑賞」、「表現」、「創造」、「音楽と関連文化」の4つの領域で指導内容が構成されている。さらに、領域二の「表現」の中には、「(1)演唱」、「(2)演奏」、「(3)総合的な芸術表現」、「(4)読譜」の4つの分野が示されている。(4)の読譜では、「音名、音符、休符及び常用の音楽記号を認識する」という、日本の「共通事項」(1)イに対応する内容が示されている。

また、日本と中国では、それぞれの小学校音楽教育課程の「内容の取扱い」の中には、読譜に関する以下の内容が示されている。

〔日本〕：学習指導要領（音楽）「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」の2（下線及び図1は引用者加筆）

(4) 各学年の「A表現」の(1)の歌唱の指導に当たっては、次のとおり取り扱うこと。

イ 相対的な音程感覚を育てるために、適宜、移動ド唱法を用いること。

(6) 各学年の「A表現」の(3)の音楽づくりの指導に当たっては、次のとおり取り扱うこと。

ウ つくった音楽については、指導のねらいに即し、必要に応じて作品を記録させること。作品を記録する方法については、図や絵によるもの、五線譜など柔軟に指導すること。

(9) 各学年の「共通事項」の(1)のイに示す「音符、休符、記号や用語」(図1)については、児童の学習状況を考慮して、次に示すものを音楽における働きと関わらせて理解し、活用できるよう取り扱うこと。

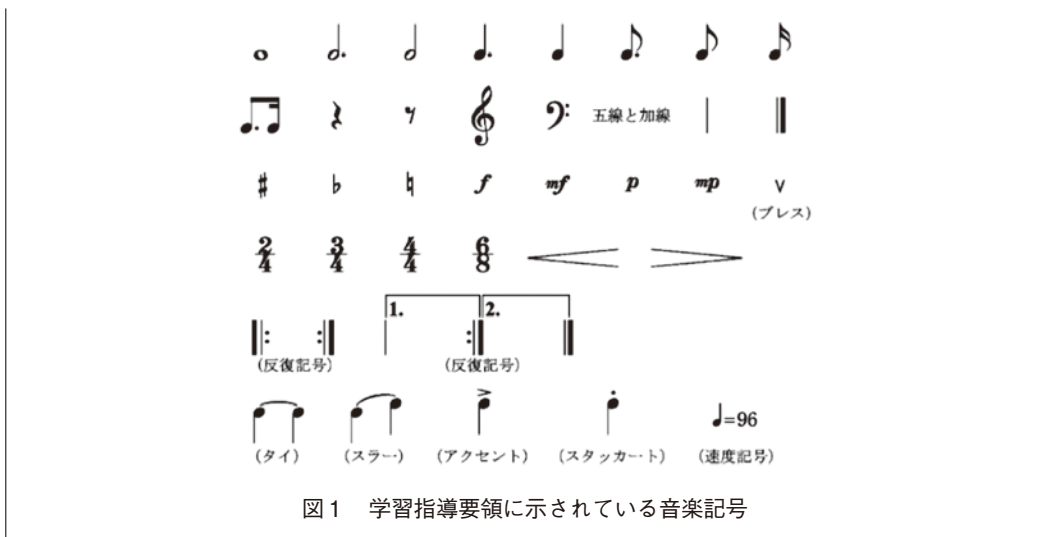


図1 学習指導要領に示されている音楽記号

注目すべきなのは、「相対的な音程感覚を育てるために、適宜、移動ド唱法を用いること」のように、移動ド唱法が明記されていること、その目的を「相対的な音程感覚を育てる」としていることである。日本の場合、「適宜」と入れているのは、器楽指導の場合、実態として固定ドで読譜を行っていることを反映したものであると考えられる。

〔中国〕：音楽課程標準「内容の取扱い」(下線は引用者加筆)

楽譜とは、音楽を記録するための記号であり、音楽を学ぶための基本的なツールである。音楽鑑賞、演奏、音楽創作などの実践的な活動に参加するためには、楽譜を読む能力が必要となる。読譜指導は、演唱、演奏、創造、鑑賞などの授業内容と連動し、児童の感性や認知をもとに行うことが大事である。読譜指導を行う際に、児童の身近な歌や曲を学び、または楽器を演奏しながら学ばせることができる。

我が国で用いられている楽譜は、主に数字譜と五線譜の2種類で、各学校が実際の状況に応じて選択できるようになっている。しかし、五線譜の指導には、首調唱名法を使うことを提唱する。

ここでいう「首調唱名法」とは階名で歌うこと、すなわち移動ド唱法である。これに対して、固定ドで歌うことを「固定調唱名法」という。国の方針では、五線譜の指導においても移動ド唱法が提唱されている。だが、先に述べたように、中国では、五線譜の場合、固定ドで読むことが一般的になっている。学校教育においても同様である。すなわち、日本でいう固定ド唱法、中国でいう固定調唱名法である⁹。

次に、学習指導要領と音楽課程標準の内容に依拠した、日本と中国の小学校音楽教科書の中で、読譜がどのように取り上げられているのかについて、次章で見えていきたい。

2. 現行の音楽教科書における読譜に関する内容の比較

2017（平成29）年の学習指導要領の告示に伴い、2020（令和2）年度の全面実施に向けて、日本の小学校音楽教科書が改訂された。しかし、中国の現行の小学校音楽教科書は、今なお2011年に頒布された音楽課程標準の内容に基づいて作成されたものが使用されている。

本章では、日本における2020年に発行された2社の教科書（教育芸術社、教育出版）と、中国における2013年に発行された1社の教科書（人民音楽出版社）のそれぞれ全学年のものを対象とし、読譜に関する内容を「リズム」、「音名と階名」、「楽譜」の3つの項目に分類し、比較分析していきたい。

2-1. リズムに関する学習内容

日本の学習指導要領にみられる低学年の指導内容では、「器楽の活動」の中に「(ア) 範奏を聴いたり、リズム譜などを見たりして演奏する技能」が示されている。低学年の児童に対しては、聴奏と視奏の能力の育成が求められていることが分かる。

一方、中国の音楽課程標準にみられる低学年の指導内容では、「読譜」の中に「簡単なリズムを認識し、音（おと）、言葉、体の動きで簡単なリズムを表現することができる」ことが示されている。低学年の児童に対しては、リズムに対する感覚の育成が求められていることが分かる。

ところで、リズム学習について言及する場合は、「リズムの呼称法」に注目しなければならない。表2は、日本と中国の小学校音楽教科書に記載されているリズム唱について示したものである。

表2 日中両国の小学校音楽教科書にみられるリズム唱の表記

学年	教育芸術社（日本）	教育出版社（日本）	人民音楽出版社（中国）
1			
2			
3		記載なし	記載なし
4～6	記載なし	記載なし	記載なし

表2をみてみよう。日本と中国の小学校第1学年のリズム学習は、音符ではなく、図形を用いてリズム唱の指導を行っていることが分かる。

日本の第1学年の音楽教科書におけるリズム呼称としては、ほぼ「たん、たた、うん」のような擬声語を用いている。4分音符を「タン（たん）」、連続の8分音符を「タタ（たた）」と表記するものが圧倒的に多い。このことについて、牛頭真也は、外国の教則本等を日本国内版に編集した際に、日本国内で通常用いられているリズム呼称を当てはめたことが推察できるという（牛頭 2020：30-31）。

一方、中国では固定的な呼称がない。絵譜の通り、人の動作を表す動詞を使い、「走（ゾウ）」¹⁰と「跑（パウ）」¹¹など、音符の長さの変化が身体で客観的に表現できる形で、拍とリズムとの関係を児童に感じ取らせるようになっている。このような指導方法はダルクローズとオルフからの影響があると言われる（楊薇 2010：28-30）。しかし、中国の教育現場では、教師あるいは児童の状況に応じて、リズムの呼称とその教え方が異なることがよく見られる。例えば、4分音符を「ダー」、連続の8分音符を「ティティ」、連続の16分音符を「ディリディリ」で読み、または4分音符を「梨（リー）」、連続の8分音符を「苹果（ピンゴウ）」、連続の16分音符を「水晶葡萄（スイジンプタオ）」で読むなど¹²、様々な呼称が用いられている。

ところで、リズムパターンの表記を見てみると、日本では固定的な図形（○、◇など）が用いられていることが分かる。一方で、中国では数字譜の記譜法と同じように、音符を「X」のリズム記号（表2）に置き換えている。これは数字による記譜法とつながっているので、旋律楽譜とリズム楽譜の読み方を同時に学習させることができると考えられる。

第2学年になると、日本の音楽教科書では、絵譜ではなく、一般的な音符と休符が示されている。教育芸術社（日本）では、第1学年と同じようなリズム呼称法が用いられているが、教育出版（日本）では、4分音符に「タン」と「びょん」、連続の8分音符に「タタ」と「びょこ」などの二種類のリズム呼称が用いられている。

一方、中国の音楽教科書では、第1学年と同じようなリズム呼称法が用いられている。さらに、両国とも、第4学年以降は、リズム呼称に関する記載がみられなくなっている。

2-2. 音名と階名に関する学習内容

まず、音名と階名の定義について確認しておきたい。

渡鏡子は「音名とは、音組織に属する各音の音高に対する固有名のこと。これと類似性のある音の呼び方に階名がある。しかし階名は音階に属する各音の相対的関係を示すものであり、実際の音高は考慮外にあるのに対して、音名は一定の音高の表示をたてまえとしており、音律と標準音が厳密に定められている限りにおいては、一定の周波数の音と対応する」と述べている（渡 1981：490-491）。音高に対する固有名である音名を識別できる能力を絶対音感という。この絶対音感について、榊原彩子は、絶対音感の発達には臨界期が存在し、6歳を超えると絶対音感習得が困難であると指摘している（榊原 2004：485）。つまり、これまでの学習歴に関わらず、絶対音感は全ての児童が取得できる能力ではない。

一方、階名とは、『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説音楽編』では、「絶対的な音の高さを

示す『音名』とは異なり、長音階の場合はド、短音階の場合はラをそれぞれの主音として、その調における相対的な位置を、ドレミファソラシを用いて示すものである」(文部科学省 2018:33)と定義されている。さらに、『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説音楽編』では「相対的な音程感覚を育てる」について、「階名唱について、音程、すなわち音と音の間隔を相対的に捉える力を身に付けるようにすることである」(階名唱を行う際、調によって五線譜上のドの位置が移動するため、階名唱は移動ド唱法とも呼ばれる」(文部科学省 2018:130)と説明されている。

以上のことから、6歳児以降の児童を対象とする小学校の音楽科教育において目指すべきなのは、相対音感の教育、すなわち「相対的な音程感覚を育てる」ことだと考えられる。

ところで、音名と階名は、読譜において、特に五線譜の読譜における最も重要な柱となることである。音階の諸音や楽器奏法の一動作にそれぞれシラブル(音節)を対応させ、音程やリズムをつけて歌うことを唱法という。特に西洋音楽では、唱法は「ソルミゼーション」とよばれ、現在は「ドレミファソラシ」が一般的に用いられている(小川昌文 2004:474)。

唱法は、楽譜の読解と演奏の上達を促すための有効な手段である(同:474)。しかし、日本と中国の音名と階名のシステムは、西洋の影響によるものだが、その取り入れ方には大きな違いがある。

まず、表3の日本と中国の音名システム、表4の日本と中国の階名システムを比較しながら見ていく。

表3 日本と中国の音名システムの比較

英米	C	D	E	F	G	A	B
日	ハ	二	ホ	ヘ	ト	イ	ロ
中	C	D	E	F	G	A	B

日本では、音名に日本語を用いて「イ、ロ、ハ」などの片仮名で表記されている。一方、中国では、音名に英語を用いて「A、B、C」などのアルファベットで表記されている。しかし、日本ではアルファベットが音名として使われることもあるが、楽典における正式な音名の呼称はイロハ音名である。日中の調名の表記法にも音名が用いられている。例えば、英米の「C Major」は、日本で「ハ長調」、中国で「C大調」と呼ばれている。

表4 日本と中国の階名システムの比較

英米	do	re	mi	fa	sol	la	si
日	ド	レ	ミ	ファ	ソ	ラ	シ
中	1	2	3	4	5	6	7

日本の小学校音楽教科書では、基本的に五線譜が用いられている。指導の場面では、主にドレミを用いた唱法が使用されている。さらに、低学年の階名唱の導入では、ドレミをつけた絵譜を使用する場面がみられる。

一方、音楽教科書における器楽の学習内容の中では、教科書に「ドとソの音をふきましょう」という指示文がよくみられる。

尾見敦子は、鍵盤ハーモニカの鍵盤と指番号に示した「ドレミ」は、階名の「ドレミ」ではなく、音名の「ドレミ」のはずであった。つまり、階名だけではなく、「ドレミ」は鍵盤の名前として、事実上「音名」として導入されていると指摘している（尾見 2009：77）。やや分かりにくいのが、相対的な音高感というよりも、絶対的な音の高さを、ハ長調のドレミで示していると言える。しかも、階名と音名の違いは、教科書ではほとんど説明されていない。

図2は、日本の教育芸術社の小学校音楽教科書にみられる音階の示し方である（小原光一他 2020：85）。



図2 日本の音楽教科書にみられる音階の示し方（教育芸術社）

教育芸術社の教科書では、音名と階名を、五線譜上の音階の各音に対応させて示している。しかし、注目すべきなのは、ここに示した音名は、日本特有の「イロハ音名」である。ヘ長調やニ短調では、音名「へ」の音を「ド」、 「ニ」の音を「ラ」と読み替えて階名が付されている。すなわち「移動ド」のドレミとして使用されている。

一方、教育出版の教科書をみてみよう。図3は、教育出版の教科書にみられる音階の示し方である（新実徳英他 2020：13）。

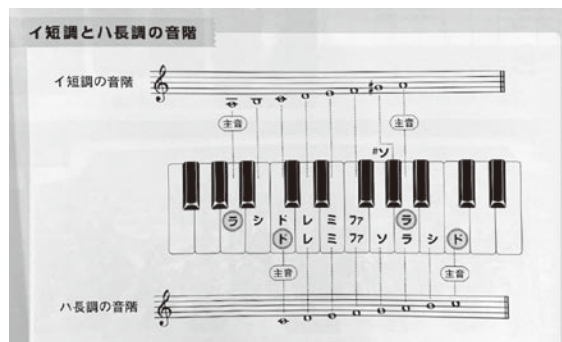


図3 日本の音楽教科書にみられる音階の示し方（教育出版）

教育出版の教科書では、音名は示されておらず、ハ長調とイ短調の階名を、五線譜上の音階の各音の下に示している。教育出版の教科書では、音名、ハ長調及びイ短調の階名以外については触れられていない。先に、日本の小学校学習指導要領（音楽）の歌唱指導の配慮事項に「相対的な音程感覚を育てるために、適宜、移動ド唱法を用いること」という文言があることを示したが、教育出版の教科書には、音名、移動ド唱法に必要な階名に関する記述は全くみられない。

こうしてみると、日本の教科書にみられる図2や図3の表記だけでは、階名や音名について正しい理解が得られるのは難しいことは明らかである。

日本において、移動ド（階名）、固定ドのどちらで読譜指導を進めていくのかは、実は、教育現場における長年の懸案事項であり、今もって解決していない問題である。小川昌文は、1947（昭和22）年の試案以来、「移動ド唱法を原則とする」とされてきた学習指導要領に対して、現場では様々な混乱が教師らを悩ませてきた。さらに、日本戦後の音楽教育では、「移動ド唱法」と「固定ド唱法」をめぐる論争が、長い間行われてきたが、明確な結論をみないまま今日にいたっている。そのような状況にあって、「ドレミ」という階名は一種の音名としても定着している現状があると指摘している。つまり、小川昌文が指摘するように、同一の呼称が異なる2つのシステムに使用されているのである（小川昌文 2004：474）。小川容子は、このような事態に対処するために、平成10年の改訂で「ハ長調・イ短調」だけを指導するという方針に変更されたというが、混乱した状況は未だ変わっていないと指摘している（小川容子 2005：41）。混乱どころか、このような方針で指導された子供たちは、階名や音名に関する知識がほぼ皆無であることが吉田孝の研究で明らかになっている。大学生を対象とした吉田（2012）の調査によると、五線譜上の音をみて、音名（ハニホヘトイロ）を正確に答えていた学生は3.6%（166人中6人）、ハ長調、イ短調以外の楽譜をみて、階名を正確に答えていた学生は0.6%（166人中1人）とごくわずかであった（吉田 2012：110-112）。

一方で、中国では、日本でいう「階名」を「唱名」と呼んでいる。図4は、中国の音楽教科書にみられる音階の示し方である。中国では、音名を「CDEFGAB」で、唱名（階名）を「1 2 3 4 5 6 7」で児童に学ばせる考え方がみられる。前述のように、中国の小学校音楽教科書では、数字譜または五線譜が用いられた2種類の版本がある。しかし、数字譜による教科書を選択して使用する学校や教師が圧倒的多数という現状がある。さらに、階名の「1 2 3」と数字譜がつながっているので、五線譜より、数字譜を使用すれば、授業を気軽に進めることができる¹³。さらに、中国の伝統楽器の記譜法も、ほとんど数字譜が用いられている。このことが、数字譜が中国に根ざした学習方法となっている要因であろう。

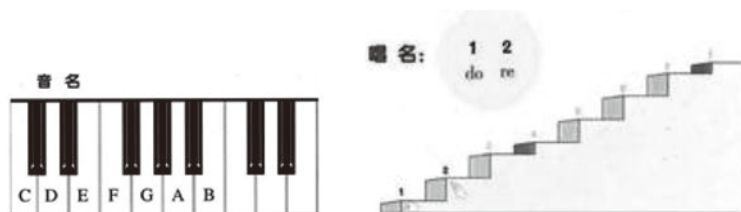


図4 中国の音楽教科書にみられる音階の示し方(人民音楽出版)

2-3. 楽譜の種類と特徴

ここでは、日本と中国の小学校音楽教科書にみられる楽譜の種類とその特徴について整理する。

次の表5は、日本と中国の教科書にみられる楽譜の種類である。ここに示した楽譜の種類は、長谷川恭子（2014）の絵譜の分類と解説を参考しながら、筆者が改めて分類してみたものである。では、表5をもとに、日本と中国の小学校音楽教科書では、どのような楽譜が示されているのかを見ていく。

表5 日本と中国の小学校音楽教科書にみられる楽譜の種類

楽譜の分類	教育芸術社（日本）	教育出版社（日本）	人民音楽出版社（中国）
①ドレミ絵譜			
②ドレミ線譜			記載なし
③かな線譜			記載なし
④一部抜きかな線譜	記載なし		記載なし
⑤数字絵譜	記載なし	記載なし	
⑥五線譜/数字譜			

表5の通り、日本と中国の小学校音楽教科書では、合計6種類の楽譜がみられる。ここに述べた階名は、日本の場合はドレミ、中国の場合は1 2 3のことである¹⁴。次に、表で示した①～⑥を説明していく。

- ① ドレミ絵譜とは、絵または黒抜きの丸の中に、階名が書かれているものであり、旋律の高低を表しているものである。
- ② ドレミ線譜とは、一般的な五線譜ではなく、五線譜を基に、階名が書かれた絵または黒抜きの丸が使用され、旋律の高低を表しているものである。
- ③ かな線譜とは、一般的な五線譜の形態で、全曲をとおして、音符の中に階名が書かれているものである。
- ④ 一部抜きかな線譜とは、前述のかな線譜と同じように、一般的な五線譜の形態で、音符の中に階名が書かれているものであるが、全曲をとおすわけではなく、一部だけが階名が書かれているものである。

- ⑤ 数字絵譜とは、一般的な数字譜を基に、階名が使用され、旋律の高低を表しているものである。
- ⑥ 教科書で示している一般的な五線譜と数字譜である。

ここでいう絵譜とは、通常の楽譜ではなく、絵図の形の楽譜を用いて分かりやすく音楽を表す記譜の一種である。絵譜は、日本と中国の両方の小学校音楽教科書に掲載されており、さらに、日本の絵譜は、読譜能力を系統的に育成する導入指導を模索した過程で、五線譜に抵抗をもつことなく慣れさせるために取り入れられた教材である。そのため、絵譜は読譜指導において有効な指導方法の一つと考えられる。

日本の小学校音楽教科書で用いる絵譜の意義について、長谷川恭子（2014）は以下のように述べている。

第二次世界大戦直後、我が国の小学校の音楽科教育（以下、音楽科教育）では、子どもたちの読譜能力の低さが危惧されており、読譜能力の育成の必要性が唱えられていた。このことは、当時始まった実験学校が、立て続けに三つも読譜に関するテーマで行われたことから窺える。当時の学習指導要領においても、読譜指導に関する記述が多くみられる（長谷川恭子 2014：57）。

そのような状況の中で、日本における「絵譜」は、1958（昭和33）年告示の学習指導要領（音楽）において、第1学年及び第2学年の内容「B 表現」(3) エに「絵譜を見ながら歌詞や階名で歌う。」と明記され、音楽科教育における読譜指導の場面で公的に扱われるようになった。戦後日本の読譜指導の歴史において、「絵譜」は重要なキーワードの一つであると考えられる。

中国では、公的な基準には「絵譜」に関する事項がみられなかった。しかし、オルフ・メソッドの影響で、1980年代から1990年代に、小学校音楽教育に導入しはじめた（陳鳴 2015：66）。さらに、絵譜は直観的な方式で音楽の各種要素を具体化し、音楽教育を補助する有効な手段として幅広く応用されている（同：66）。

つまり、日本と中国の絵譜は、児童の読譜能力を育成するために、開発されていた。また、絵譜も読譜指導の導入期（低学年）における簡易的な楽譜として活用されている。

以上のことから、日本と中国の小学校音楽教科書にみられる楽譜の学習内容を比較すると、大きく三つの特徴がある。

一つ目は、日本では多くの学校で五線譜を用い、中国では多くの学校で数字譜を用いていることである。また、系統的な読譜能力の育成を目指すときには、日本でも中国でも、その導入期には「ドレミ絵譜」が用いられている。

二つ目は、日本の楽譜の種類は中国より多いことである。なぜならば、中国の音楽教科書は数字譜が用いられているので、階名から五線譜の音名に読み替える必要がないのが原因だと思われる。

三つ目は、日本の絵譜では、絵譜と絵譜との間の関連性がみられることである。最初の「ドレミ絵譜」から「一部抜きかな線譜」までの学習プロセスは、一挙に成し遂げるのではなく、スモールステップ、すなわち段階的に五線譜へ移行することをねらい、様々な絵譜が開発されてきたといえる。さら

に、教育出版（日本）の教科書では、「かな絵譜」から直接「五線譜」へ移行するのではなく、「一部抜きかな絵譜」を使用しながら、「五線譜」へ移行する段階的な手順が丁寧に示されている。一方、中国では前述のように、階名から五線譜の音名に読み替える必要がないので、旋律の高低を表すために、フレーズの傾きが調整されている。

おわりに

本論では、日本と中国の小学校音楽科教育課程の基準と現行の小学校音楽教科書を研究対象に、両国の小学校音楽科における読譜に関する内容を比較して分析した。その結果、明らかになったのは次の点である。

日本の学習指導要領では「相対的な音程感覚を育てるために、適宜、移動ド唱法を用いること」、中国の音楽課程標準では「五線譜の指導には、首調唱名法を使うことを提唱する」のように、教育方針は異なるが、類似点がみられる。それは、日本と中国の小学校の音楽授業では、それぞれの楽譜の表記方法は異なるが、児童に相対的な音楽感覚を育成するために、両国とも移動ド唱法が使用されているという点である。また、日本では多くの学校で五線譜を用いて授業が行われており、器楽の学習内容以外は、全て階名を用いて授業を行う教師もみられる¹⁵。しかしながら、ハ長調の「ドレミファソラシ」という階名を、音の場所を示す音名のように捉えて指導している教師が多いことは想像に難くない。さらに、特に地方の児童は、イ短調が分からないままに、中学校に進学してしまった児童も多いという表現がある¹⁶。そのため、児童がハ長調の楽譜しか読めないで、移動ドとしての意味があまりないと推察される。

一方、近年の中国では、数字譜から五線譜へ移行する傾向が強くなり、特に専門教育に向けての音楽教室では、五線譜で授業を行うようになってきている。それに伴い、五線譜の指導を扱うことを望む声が社会的にも高まってきている。中国では、五線譜の場合、数字譜とは違い、固定ドで読むことが一般的になっている。したがって、数字譜の学習が五線譜につながらないという問題がみられる。

以上のことから、日本と中国の小学校音楽科における読譜の指導内容では、多方面から検討していく必要があると思う。そのため、今後は、日本と中国の小学校音楽科教育における読譜に関する指導法について、実際の指導場面の検討などを通して考察を深めていきたい。

註

- 1 教育芸術社の『小学生の音楽6』には、ハ長調やイ短調、ト長調とニ短調の音階と、その各音に対応する階名と音名（ハニホヘトイロ）が示されているが、階名や音名についての解説はない。
- 2 中国語では、「数字譜」を「簡譜」と言うが、本論では全て「数字譜」と表記する。
- 3 郭声健（2000）は中国の20省で「中小生音楽素質現状管窺」という調査を実施した。この調査は、地方の小学校を含め、合計1541名の生徒を対象とし、歌唱能力、音楽鑑賞能力、音楽知識能力などの分野に関する質問をアンケートで実施した。この調査によると、数字譜が読める生徒は68%を占め、五線譜が読める生徒は42%を占めていることが分かる。

- 4 日本と中国の音楽教育に関する研究には次のようなものがある。許燕, 筒石賢昭, 衣梨 (2007) による文化交流史に関する研究, 李芸蕾 (2017) による創作・音楽づくりに関する研究, 董芳勝 (2007, 2008, 2009) による教科書の内容に関する研究。
- 5 現行の「小学校学習指導要領 (平成29年告示) 第6節 音楽」は平成29 (2017) 年告示のものである。
- 6 現行の『義務教育音楽課程標準 (2011年版)』は2011年告示のものである。中国の義務教育は, 小学校・中学校と合わせて9年間であり, 小学校の学制は五年制と六年制がある。
- 7 小学校の「学習指導要領」と『音楽課程標準』の内容をそのままに抜粋して示した。『音楽課程標準』の内容は筆者が訳した。
- 8 中国の小学校学年段階は, 低・中・高学年で示されているが, 『音楽課程標準』では, 中学年と高学年 (第3学年から第6学年まで) の項目内容が共通している。
- 9 このことは, 筆者が2021年7～9月に実施した, 中国の小学校音楽教諭への読譜指導の現状に関するインタビュー調査から明らかになったことである。この調査はオンラインで半構造化インタビューを実施し, 協力者は中国の公立小学校の音楽教諭 (合計3名) である。このインタビューについては, 別稿で取り上げる予定である。
- 10 中国語の「走 (ゾウ)」とは日本語の「歩く」の意味である。
- 11 中国語の「跑 (パウ)」とは日本語の「走る」の意味である。
- 12 註9と同じ。
- 13 註9と同じ。
- 14 日本の楽譜に示されている数字は, 階名ではなく, 鍵盤楽器を演奏する際の指番号である。
- 15 このことは, 筆者が2021年9～12月に実施した, 日本の小学校音楽教諭への読譜指導の現状に関するインタビュー調査から明らかになったことである。この調査はオンラインで半構造化インタビューを実施し, 協力者は日本の公立小学校の音楽教諭 (合計3名) である。このインタビューについては, 別稿で取り上げる予定である。
- 16 同上。

引用・参考文献

【教科書】

- 小原光一他監修 2020 『小学生のおんがく1』教育芸術社.
 小原光一他監修 2020 『小学生の音楽2』教育芸術社.
 小原光一他監修 2020 『小学生の音楽3』教育芸術社.
 小原光一他監修 2020 『小学生の音楽4』教育芸術社.
 小原光一他監修 2020 『小学生の音楽5』教育芸術社.
 小原光一他監修 2020 『小学生の音楽6』教育芸術社.
 新実徳英他監修 2020 『おんがくのおくりもの1』教育出版.
 新実徳英他監修 2020 『音楽のおくりもの2』教育出版.
 新実徳英他監修 2020 『音楽のおくりもの3』教育出版.

新実徳英他監修 2020 『音楽のおくりもの4』教育出版.
新実徳英他監修 2020 『音楽のおくりもの5』教育出版.
新実徳英他監修 2020 『音楽のおくりもの6』教育出版.
呉斌他編集 2013 『音楽（簡譜）一年級上冊』人民音楽出版社.
呉斌他編集 2013 『音楽（簡譜）一年級下冊』人民音楽出版社.
呉斌他編集 2013 『音楽（簡譜）二年級上冊』人民音楽出版社.
呉斌他編集 2013 『音楽（簡譜）二年級下冊』人民音楽出版社.
呉斌他編集 2013 『音楽（簡譜）三年級上冊』人民音楽出版社.
呉斌他編集 2013 『音楽（簡譜）三年級下冊』人民音楽出版社.
呉斌他編集 2013 『音楽（簡譜）四年級上冊』人民音楽出版社.
呉斌他編集 2013 『音楽（簡譜）四年級下冊』人民音楽出版社.
呉斌他編集 2013 『音楽（簡譜）五年級上冊』人民音楽出版社.
呉斌他編集 2013 『音楽（簡譜）五年級下冊』人民音楽出版社.
呉斌他編集 2013 『音楽（簡譜）六年級上冊』人民音楽出版社.
呉斌他編集 2013 『音楽（簡譜）六年級下冊』人民音楽出版社.

【和文文献】

安達真由美 2014 「読譜法」日本音楽教育学会編『日本音楽教育事典』: 613.
小川昌文 2004 「唱法」日本音楽教育学会編『日本音楽教育事典』: 474.
小川容子 2005 「公教育における音名唱指導の実態—質問紙調査による移動ド・固定ド唱法の比較—」『鳥取大学地域楽部紀要』第1巻 第2号: 41-53.
尾見敦子 2009 「提言『読譜教育』の4つの視点——ハンガリーの音楽教育に学ぶもの」『音楽教育実践ジャーナル』vol.7 no.1: 76-86.
岸辺成雄 1982 「階名」平凡社『音楽大事典』第2巻: 502-503.
牛頭真也 2020 「初学者ピアノ教育と小学校音楽科教育の読譜について: リズム唱に着目して」『洗足論叢』48: 27-39.
榎原彩子 2004 「なぜ絶対音感は幼少期にしか習得できないのか?——訓練開始年齢が絶対音感習得過程に及ぼす影響——」『教育心理学研究』第52巻 第4号: 485-496.
長谷川恭子 2014 「戦後の小学校音楽科教育における「絵譜」の変遷について」『実践女子大学生生活科学部紀要』第51号: 57-65.
松本正 2004 「読譜指導」日本音楽教育学会編『日本音楽教育事典』: 612.
文部科学省 2018 『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説音楽編』東洋館出版.
吉田孝 2012 「音楽科における「ドレミ」の扱いに関する一考察」『教育学論究』4: 109-116.
渡鏡子 1981 「音名」平凡社『音楽大事典』第1巻: 490-491.

【中文文献】

郭声健 2000 「中小学生音樂素質現狀管窺」『中国音樂教育』 1：6-10.

陳鳴 2015 「淺談圖形譜在小学音樂教育中的有效運用」『教師』 28：66-67.

中華人民共和國教育部 2011 『義務教育音樂課程標準（2011年版）』 北京師範大學出版社 2019年11月 第26次印刷.

林翰羽 2018 「近現代我國中小學校課程標準的歷史變遷」『音樂天地』 8：28-31.

楊薇 2010 「中国基礎音樂教育中的識譜教學研究」 南京藝術學院 vol.5：1-51.